

高橋メモ（パネリストの発言を基に、高橋独自の視点と若干の主観を交えて整理）

教育の不易	教育の流行
ダライ・ラマの言葉「人は何のために生きるのか、それは、幸せになるため、人に喜びを与えるためである。」 →教育における人間形成の目的はずっと変わっていない。	
柔道の「道」には、「柔術」を手段として人間教育を行うという意味が込められている。世の中に役に立つ人間を育てること。 →授業始め、学校教育全体の担うことも正しく同じ。	
基礎はティーチングにより誰もが身に付けるものを身に付けなくては、その上の独自性や個性の発揮とそれに寄り添うコーチングは成り立たない。	コーチング、ティーチングの内容が明確化されてきている。両輪で育成を行うことは重要。コーチングは、「A という姿を目指すならあなたは B をするとよい。」と対話をしながら目標へ導く、伴走するというのが主流。
	コーチング、ティーチングに加え、ケアリング（受容し寄り添う）ことが今は重視される。クレームに対して「確かにそうですね」という一言はケアリングに有効な表現である。
教師の使命は子供の心に火をつけること。	
生きる力とは、人生を拓き、社会参画する「人間力」も指す。	
全てを議論させる必要はなく、やはり「ならぬものは、ならぬ」と教えることが大切。	グローバルな時代で、立論し相手を尊重しながら議論を闘わせる力や場の設定は必要なことかもしれない。
	日本人は確かに発信が下手である。しかし、発信力（手段）を磨く前に、何を話すかが大切。
	議論のための議論を大人がやっている限り、子供にいい議論の手本は見せられない。結局「変えるのは難しいよね。」で結論付いてしまい、覚悟がない。

	英語教育については、英語を使うマインドの説明が現場にないままに教科が進んでしまっている。
	日本のスポーツが近年躍進している理由は、分業制が進んだから。学校も様々な専門性のある人がチームとして子供に関わるべき。
	親心の無い親が増えている。子供のために犠牲になろうとする親が少ない。全国の教育長会議でも課題となっている。
	部活動は週2日休みにしても効率かつ効果的な指導理論が進化しているので能力は身に付く。
	変化が激しすぎてついていけない世の中で、いかに見通せるか。
子供でも大人でも誰もが悪くなろうとは思っていない。子供の人格を見抜き、自分事でものを考えさせる技量こそがこれからの教師にますます必要。	これからは個に応じる形で指導方法を組み立てていく。
守破離の守とは厳しさ（何事も基礎を身に付けるのはつらい。苦手なこともやらねばならないから。）破とは楽しさ（できてくるとさらに楽しい）、離とは自主性（ここまで来ると自らで切り拓く力が備わっている）のことではないだろうか。	

☆シンポ後の食事会での舞台裏☆

- 道具を使うスポーツは、その道具を体の一部のように扱えることが大切なので幼いころから取り組むことも必要条件である。卓球がよい例。水泳や陸上、サッカー、バスケ、バレー、柔道などは、中学校から始めても技能は伸びる。
- 山口先生の両親は全く柔道の経験がなく、それがかえって親が口を挟むことなく山口先生を伸び伸びと柔道に打ち込めたことに繋がったかもしれない。
- 私学との学費の差が少なくなり、特典も私学の方がどんどん充実しているので、国公立のスポーツ環境はますます厳しくなる。
- 学力上位の私学の強豪運動部が技能の優秀な選手獲得のために学力を度外視したスカウトを行っていたことを校長が止めさせたが、その部の成績は全く下降しなかった。やはり知徳体は関連している。